

# 不祥事対策について考えるなかで

前岡山県教育委員会教職員不祥事防止対策チームアドバイザー  
岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

塚 本 千 秋



「教育委員会は私たちのことを信用していないのですか？」  
不祥事防止研修会の後、一人の男性教諭から質問が出た。

その日の研修は、「不祥事を起こすのは特殊な人で、自分は無関係と思いやすが、誰もが起こす可能性がある」「とりわけ猥褻事案は、加害者の大半が男性なので、男性の皆さんはわがこととしてとらえてほしい」という内容だった。

たしかに「どの男性も起こす可能性がある」「だからあなたも起こすかもしれない」という論法には誇張と飛躍があり、質問者が不愉快に感じたのも理解できる。

その一方で私は思った。「皆さんを信頼しているからこそ、こんな言い方になるんです」いきなり私的な話になるが、先日、私はパソコンを相手に将棋を指していた。最近のソフトは強いから、ハンディとして飛車角二枚落としてもらっても、なかなか勝てない。一手でも間違えると、あつという間に形勢が傾き、最短手順で負かされてしまう。

私はつぶやく。

「もうちよっと人間らしく指せないか。」

「たまにはそちらも間違えろよ。」

棋力向上を目指しているならいざしらず、私はただ遊びたいのだ。そしてこうした対戦型の遊びの醍醐味は、両者が好手と悪手を出しあつて、形勢が二転三転するところにある。コンピュータには、うっかりと大駒をタダで捕られる「軽率さ」がない。逆に「飛車もらっちゃうけど、いいの？」とにやにやしなから指摘する「ユーモア」もない。敗戦続きでしよげている私に手心を加える「気遣い」もない。強引かもしれないが、教育者に不可欠なのは、こうした人間らしい「軽率さ」、「少し意地の悪いユーモア」、「ささやかな気遣い」ではなからうか。

残念なことに、まさにそうした人間らしさがあるだになつて生まれる不祥事がある。もちろんそれも不祥事である以上、あつていいわけはない。が、それにこだわりすぎて、人間らしさを失つては元も子もない。

冒頭の話に戻ろう。「あなたも不祥事とは無縁ではない」と話すとき、私には次のような前提がある。

「だってあなたは子どもたちのために、人間らしさを総動員しているじゃないですか。」

そのような意味で、私は先生方のことを信頼している。心から。